

要旨

元本保証と流動性に重きを置いた日本式の資産運用～海外に学ぶポートフォリオ～

社会学部経営社会学科 河島 光児
(安田英土ゼミナール所属)

麻生太郎財務大臣によれば、日本には 880 兆円もの現預金が眠っているという。つまり、銀行や郵便局の預金口座、そして自宅のタンスの中で、ひっそり眠っている多額の現金が日本には存在していることになる。

本卒業研究の出発点はここにある。「なぜ、日本人は自分たちの現金資産を運用しないのか？」

そこで最初に、日本人の価値観や習慣といった、文化的・風土的側面に焦点を当てた調査・分析を行った。その結果、日本人は元本割れや流動性の低さなどのリスクを極端に嫌い、リスクを回避できる安全な金融商品や預金行動に向かう傾向があることを見いだした。だが、麻生大臣が指摘するように、いわゆる巨額な「タンス預金」の存在は、株式市場の低迷やその他の商品・金融市場の低迷にもつながり、結果として日本経済の低迷にもつながっていく。日本経済の景気浮揚のためにも、巨額な「タンス預金」が市場で運用されることが望ましい。こうした観点から、本卒業研究では日本人の性向に、より適合する株式投資理論の可能性を検討した。

その結果、日本人の安定性・安全性を求める価値観的な側面から、リスクヘッジに適している株式投資論として、ハリー・マーコウィッツの証券投資理論（「資産運用の安全性を高めるための一般理論形成」により 1990 年ノーベル経済学賞受賞）に基づく株式投資と資産運用を提唱したいと考える。

だが、その一方で、どのような投資理論に基づいた株式投資でも、リスクを完全にゼロにすることは出来ないことも、本卒業研究の結果として指摘しておきたい。

「では、一体どうすれば巨額のタンス預金を市場に引きずり出すことが出来るのか？」と問われることになる。この問に対する明確な回答は用意できなかった。解決策としての政策的な対応や制度的対応は、極めて非現実的にならざるをえない。「日本的なものの見方」が存在する限り、日本の個人資産がリスクの高い資産運用に投資される可能性は低いままであろう。

しかしながら、こうした「日本的なものの見方」が未来永劫変化しない、という立場を本卒業研究の結果は否定する。金融イノベーションや社会イノベーションの進展によって、このような見方は大きく変わる可能性があることを指摘しておきたい。